

IYC 全国協議会による千葉大学寄附講座「非営利市民事業と協同組合」について

千葉大学での寄附講座は今年度4回目を迎える。学部初年次を対象として提供される普遍教育（一般教養）科目のひとつとして本科目は設置されているが、全10学部からそれぞれ学生が集まっていることもあり、問題関心も多様である。今回は、多くの学生が大学卒業後の4つのライフステージで出会う問題を取りあげ、それぞれの分野で協同組合がどのような事業を通じて助け合いの精神を発揮しているのかを学べるようなスタイルになっている。

全体の構成は、10/6の初回は、ガイダンスとともに、千葉大学生協の内赤尊記専務理事に千葉大学と大学生協の歴史と現在についてお話いただいた。学生時代に千葉大学生協の学生委員として様々な企画に関わられた経験からはじまり、千葉大学の学生文化がどのように変容していったのかなど、時代を感じさせる昔の写真などをとりいれながらお話いただいた。大学生協がどのような存在であるのか考えたことがなかった学生が多かったので、自分たちが組合員として意思決定に参加できることや、学生組合員同士の助け合いの組織であることを知り、学生にとって協同組合というものが身近であることを確認できる導入講義となった。

翌第2回は、「協同組合概論」として、城南信用金庫より吉原毅顧問をお招きし、協同組合の意義について長期の歴史的視座から協同組合運動を捉えたお話をいただいた。今日目にしていく経済のグローバリゼーションがいかなる現象であり、どのような問題を抱えているのか、そしてその対抗ヴィジョンとして協同組合運動の歴史や思想について説明がなされた。〈近代〉というものをめぐり多様な思潮が論戦を繰り広げるなか、地域性を維持しながら根気強くよりよい社会を求める運動を続ける協同組織の今日的役割と課題が、はっきりと学生にも共有されることになった。

さて、第3回以降は「講義」→「課題に対するグループ・ワーク」→「グループ報告会」という形で、最初に学外からお迎えした協同組合関係の実務・研究者からレクチャーを受け（90分1回）、次に、関連して現在のわれわれが直面している課題について学生なりの解決策を考えていくというグループ・ワークの時間を経て（90分1回）、最後にそれぞれのグループが自分たちで考えた提案を履修学生全体で共有し質疑応答を行う時間（90分1回）という形で進められる。3回分が1セットで、4つのテーマに対して学びを深めるという趣旨になっている。

上述のように、本年度は「ライフステージ毎に出会う協同組合」という大テーマの下に4つの具体的テーマを取りあげた。まず、教育を受ける学生という立場を卒業し、社会人になる第一歩を想定し、「働くとはどういうことか」あるいは「働くことの意味はどこにあるのか」というやや哲学的といってもいい人生の問いに対して、ワーカーズ・コープちばの菊地謙専務理事をお招きし、労働者協同組合（ワーカーズ）がどのような精神で活動しているのか、仕事おこしを通して地域を活性化させようとする多様な取組についてお話いただいた。また、同団体が実施している生活困窮者自立支援事業のうち、習志野での学習支援にかかわってきた東邦大学

4年生の中野さんにも登壇してもらい、千葉県内にある子どもの貧困といった問題について説明があった。中野さんは来年度よりワーカーズコープちばに入協するというので、履修者にとっても近い年齢の同じ学生が、どのような経緯でワーカーズで働くことを決意するに至ったのかなど、興味深い話に共感する学生も多くいたようだ。職場でのハラスメントやブラック企業の問題など、学生が、自覚的に「働くことの意味」の問い返すことで、ディーセントな働き方がなぜ必要なのかなど、グループワークにおいてもたくさんの学生同士での討論が重ねられた。

2つ目のテーマは、結婚や出産という家族にかかわる協同組合をとりあげた。（公財）生協総合研究所の近本聡子研究員をお招きし、現代の共同保育運動を中心に、戦後の家族や子育ての変遷と課題についてお話いただいた。「子どもの貧困」という共通のテーマで第1テーマとの繋がりも見いだせる内容となっており、シングルマザーにおける仕事と子育てを両立することの難しさについて説明が行われ、男性優位の就労環境の問題や、国際福祉レジームの比較からみた日本社会のもつ偏りなどといった問題の深刻さが、データやグラフを用いて可視化された。男女の賃金格差がなぜ生まれたのか、あるいは保育園の問題など、育児サービスの社会化が不十分な中で、ますます増える共働き世帯にはどのような暮らしが待ち受けているのかなど、生活に関わる困難な諸問題について、政府任せではなく実際に地域などでの人びとが協同組織を作ることで解決を図ってきたという事実にも光が当てられた。学生のグループ・ワークでは、千葉大学の学生が子育て支援組織を立ち上げた場合の優位性や、その際どのような対象を想定するのか、あるいはどのくらいの地理的な広さで行うのがよいのかなど、望ましい子育て支援のあり方について具体的な議論が活発に行われることになった。

3つ目のテーマは、地方・農村と協同組合をとりあげた。千葉県野田市で荒木農園を営んでいる荒木大輔氏をお招きし、首都圏の食糧供給基地である千葉県での農業と地域社会の現状についてお話いただいた。大学卒業後にJA全国中央会で勤務されていた荒木氏は、地元である野田が空き地だらけで大多数の就農者がリタイア直前であるという担い手問題の現実を目にし、一方で地域社会を活性化するという目的、さらに今こそ農業経営ではないかという農業の可能性にチャンスを見て農園をはじめることになった。千葉大学の学生の多くは都市部出身で、農業もさらには農村の風景すら知らないという。同じ千葉で都心から30km圏というごく近くの地域で何が起きているのか、荒木氏の講義は新しい発見とともに、自分たちの就農の可能性、さらに日本の食糧問題など、多面的に「農と暮らし」について考える時間となった。学生のグループ・ワークも活発であったが、やはり農に対するイメージがまだ学生の間でボンヤリしていることが報告会で確認された。第1・第2テーマではかなり現実的な提案が出されていたことを考えると、（講座の報告からは脇道にそれるが）若者を中心に多くの日本人が、おそらく農業によって日々の暮らしが支えられていることや、都市と地方との切実な問題などについてかなり情報不足であることが分かる。正直なところ、千葉大学でこの程度のリテラシーしか備わっていないのであれば、農政などにおいて誤った世論が形成されるのではないかという危惧は決して杞憂ではない。日本の国土や食を含む暮らしを支える第一次産業という自分たちの足

元をしっかりと学ぶ機会が決定的に不足している。大学のみならず、初等教育からの厚い教育が必要だと実感させられた。

最後のテーマは、介護や老い、看取りといった領域での協同組合について考えることになった。今後、介護離職の増加などが見込まれ、介護される側というだけではなく介護する立場を含め、家族や仕事のあり方に大きな変更が迫られる時代となってきた。今回は、社会福祉法人生活クラブ風の村理事長で、購買生協であった生活クラブの運動が福祉や介護の領域へと進出を果たした立役者でもある池田徹氏をお迎えし、お話をいただいた。家庭における食や環境といった問題意識で集まった組合員たちにとって、さらなる不安は、将来の介護問題であった。自身が高齢になったとき住みたいと思えるような施設がない、だったら自分たちでそういう理想的な施設を作ろう、これが全国初の個室ユニット型特別擁護老人ホーム「風の村」の建設に繋がる。少子高齢化が何をもたらすのかという現代日本のマクロな社会問題を糸口として、なぜ風の村のような施設が広がり、千葉県域最大の社会福祉事団体へと成長したのかという歴史的説明が行われた。2011年に設立された生活クラブいなげビレッジ虹と風は、この授業を開いている千葉大学西千葉キャンパスから直線距離 1km（道なりに 1.5km）の距離にあるが、ここでは自治会などを巻き込んで新しい地域そのものを創っていくような運動へと発展している。グループワークでは、「行政や営利企業よりも地域住民自身の助け合いの方がより効果的であると思われる社会課題をひとつとりあげ、具体的な事業内容を計画せよ」という課題に取り組んでもらった。自治組織による問題解決がどのような長所を持っているのかを学生自身に考えてもらう機会であったが、多くは、家計やインフラなどの外形的に比較できる問題ではなく「孤独」という心の問題や、さらに面白いことに「地域の熱」といった表現を用いた人びとの関係を豊かにする事業提案がなされた。具体的には見守り活動や乗り合いタクシーなどが提案されたが、なぜそのような取組が必要なのか？という理由がまさに協同の精神を発露させるものであり、各グループが雄弁に語る姿を見て、半年間の授業を通じたたくさんの学びを学生たちと共有できた喜びを確認することになった。

以上が 2017 年度の IYC 記念全国協議会寄附講座「非営利市民事業と協同組合」の概要となります。本年度は、グループ報告会での学生間のやりとりが極めて活発でした。次年度も引き続き秋学期 10 月から金曜 4 限（14:30～）の日程で開講が予定されていますが、学外者の受講も可能な公開講座となっています。すべての回への出席は必要ありませんので、興味のある回だけでも、ぜひ千葉大学まで足をお運びください。